たて割の班構成）
＊島根大学附属中学校　「宍道湖」「子どもが遊べる松江の都市環境」
＊香川大学坂出附属中学校「瀬戸大橋」「日本語の中の世界・世界の中の日本語」
　いずれも外部の専門家が指導、教師は時にはコーディネーターに。
＊信州大学附属長野中学校「世界への扉を開く」
　国際支援などのホームページを開いたり、共通テーマでのメール交換。
（３）ドイツでの「統合」Konzentration
＊内容の横の関連（接続教材をもとにして、同時期に各教科をつなぐ。）
＊レベル分けをして高さの集中（同じテーマを学年や達成度で段階的に）
＊各教科にわたるテーマの集中（確率と決定論を数学、歴史、哲学、物理、生物など）
＊典型的な生活問題における実在的集中（統一ヨーロッパ、平和の保障、など）
　このような統合の事例が７つあげられている。高橋英児（広島大学大学院のHans Clocckel の紹介に拠る）。

３、教育方法改善には、システムの見直しを。
（１）教授組織
多様な協力教授システム。学外の専門家も含む。
（２）施設設備
校内のオープンスペース、専用教室、特別教室などの多目的活用。
校外の公共施設、インターネットによる架空の施設利用。
（３）学習集団
課題別小集団学習、異学年縦割り集団、テレビ会議や電子メールによる他地域の学友。
（４）学習時間
年間総時数を決めて、１単位時間の弾力的運用。モジュールシステム（坂出）、特定曜日の午後の弾力的運用（滋賀）、合科選択（広島県の選択研究指定校）など。

これらの新しいシステムと従来のものとをどのように組み合わせるか。現場の英知をぜひとも結集してほしい。

参考文献
１、水越敏行「メディアが開く新しい教育」（学習研究社、1994）
２、水越・佐伯編「変わるメディアと教育のありかた」（ミネルヴア、1996）
３、熱海・奥田編「教育課程の編成」（ぎょうせい、1994）
４、水越・奥田編「個性を生かす教育」（ぎょうせい、1994）
５、滋賀大学附属中学校「生きる力を育てる総合学習の実践」（明治図書、1997）

〔Ⅳ〕シンポジウム

『新教科　総合人間科の成果と展望』

パネリスト
水越敏行教授　（関西大学）
鹿嶋研之助調査官　（文部省）
的場正美教授　（名古屋大学教育学部）
丸山豊教諭
（名古屋大学教育学部附属中学・高等学校）
指定討論者
山田正敏名誉教授　（愛知県立大学）
四方義啓教授　（名古屋大学大学院）

司会
安彦忠彦教授
（名古屋大学教育学部附属中学・高等学校長）
槙本直子教諭
（名古屋大学教育学部附属中学・高等学校）

安彦　校長が司会をして、シンポジウムをやるというのはあまり例がないじゃないかと思いますが、現在、本校の研究を先生方といろんな意見の違いを基にしながら、基本的には、本校の先生方の主体性を尊重して、こういう形でやって参りました。必ずしも私は、本校のやってることに全面的に賛成でもないという、片方の肩を出しているという、いつもの私のスタイルなんですが、そういうことで司会をすることがいいかなと思って、引き受けさせていただきました。今、水越先生のお話がありましたように、連絡不十分で講演の方で、はしょっていただきましたので、シンポジウムの方でも、少し時間を割いてお話しいただこうと思っております。それでは、引き続きでたいへん恐縮でございますが、テーマ的には、今、全国的な動向を、あるいは、ドイツのことも入りましたから、世界的な動向もふまえて、この総合的学習について、４時まで途中休憩を入れるつもりでおりますが、先生方と一緒に検討を深めたいと思います。では最初に私の方から、それぞれの提案者の方のご紹介を申し上げて、討論の視点と言いますか、視野を午前中、田中先生の方から話がありましたけれども、少し明確にしておきたいと思いま

す。まず、この並んでいる順番で申し上げたいと思います。文部省から、教科調査官の鹿嶋研之介先生。
(拍手)
鹿嶋先生には、この研究開発の３年間、本校をずっと見守っていただき、また、御指導いただきました。もともと進路指導的なことについて、ご自身のご専門から、本校の研究を見てきていただいております。そういう面で、また御発言もいただけると思っております。次に、本学の教育学部教授の的場正美先生です。
(拍手)
的場先生は、本学の、この研究開発の総合人間科につきましては、初年度から、ずっと続けて見てきていただき、さらに、ご専門の教育方法学の立場から、授業分析・授業研究等、非常に丁寧な御指導をいただいて参りました。教材分析も含めて、現在の本校の総合人間科の授業というものがああいう形になったということは、的場先生のお力があったという風に思います。この点、その理論的な背景みたいなものを、今日、話していただこうと思います。次に、本校研究部長、丸山豊でございます。
(拍手)
丸山先生は、３年間研究部長を実質的にやっていただいた、ということで、基調報告した田中先生とペアになって、この研究を推進して参りました。基本的には、本校の実践家集団としての、先生方の立場ですね。意図、主旨、それをお話しいただけると思います。また、具体的な、困難点、問題点、困ったことというようなことを、述懐されるのではないかと思いますが、その点について、また先生方からもいろいろ、御発言いただければと思います。最後に、本校の卒業生と現役の生徒を提案者に加えさせていただきました。総合人間科という３年間の全てを経験した、木村幸代さんです。
(拍手)
卒業生の立場で、去年の高校三年生で、今年の三月卒業したばかりですので、まだ総合人間科については記憶に新しいと思います。その成果が、どうだったのかを、直接話していただこうと思います。それから予定していた、谷口君という、高校３年生が交通事故で入院してしまいましたので、代わりにピンチヒッターとして、二人の、３年生をお願いしました。渡邊索君です。
(拍手)
それからもう一人、本間綾一郎君です。
(拍手)
最後になりましたが、二人の３年生はまさに今、発表を終わったばかりです。何を言い出すやらちょっと私、校長としても、教官の方としては心配なんですが、何を言っても、この場は研究の場ですからいいと思います。最後になりましたが、私とご一緒に司会を担当いたします、槙本直子先生。
(拍手)
総合人間科につきましては、理論的なあるいは実践的な面で、中心的な役割を果たしてこられましたので、今日、司会をご一緒させていただきます。最初に私の方は、以上でとりあえず終わりまして、あとお一人お一人の提案につきましては、槙本先生が司会を担当し、後半の討論につきましては、私が担当するということにいたします。なお、間に休憩を入れますが、その間、質問票をお願いします。その休憩のあと、最初に、お二人の指定討論の方のご意見をうかがう予定にしております。お二人の先生の紹介が遅くなりまして失礼いたしました。愛知県立大学名誉教授の山田正敏先生。
(拍手)
山田先生には、私どもの研究のまったく外から、本当に自由な立場から発言していただきます。もともと先生方もご存じのように、山田先生は大変教育実践について、いろいろな場所で大きな発言力をお持ちの方ですので、今回本当に無理をお願いして、私どもの研究のために、示唆を得るご意見をいただきたいと思ってお願いいたしました。もう一人、名古屋大学大学院の多元数理研究科の教授の、四方義啓先生。
(拍手)
四方先生は、一部の方にはご存じと思いますが、数学オリンピックというのを名古屋大学がやっております。この、企画の中心的リーダーで、本校につきましては、比較的長い間関わってきていただいております。大変教育についても、ご関心の深い方で、研究開発につきましては、その面から、運営指導委員をお願いしてまいりました。しかし、必ずしも私どもの側に立つ方ではないという前提で、むしろ、それ以外のいろいろな視野から、四方先生の方からいろいろご意見がうかがえるものと思いまして、指定討論者にお願いいたしました。
それではよろしくお願いいたします。それでは、さっそく内容に入らせていただきます。では槙本先生。

槙本　それでは、始めさせていただきたいと思います。最初、お一人15分程度でお話、提案をしていただきたいと思いますので、本校の教官から最初にお話ししたあと、共同研究者の的場先生。それから直接生徒の生の声を。そのあとで文部省の方から発言

をいただきたいと思います。それでは最初に、本校で総合人間科に３年間取り組みました、丸山研究部長の方からご提案よろしくお願いします。

丸山　丸山です。今、司会者の方からありましたけれども15分間ということで、ちょっと３年間の中身を15分で語れとはなかなか難しいんですけれども、率直な、３年間の取り組みの中で私たちが学んだこと、そして問題点。公立高校、公立中学で実践する場合にどういうことがふさわしく、どれほどいいのかという方法論も含めまして、お話をしたいというふうに考えております。レジュメを用意したんですけれども、15分では語れませんので、レジュメはお宅に帰ってから読んで下さい。レジュメをちょっと離れてお話しすることになると思いますが。

導入としましてですね、３つのニュースを頭に描いております。ひとつは、今度のこの、教育課程審議会の報告に対してマスコミが非常に注目をし始めている、ということです。朝日新聞が11月15日に取材に参りました。授業を見せてくれと。社会部の女性記者で、非常に良く勉強されているなと。社会部で取り上げたんです。本校が紹介されたのが18日です。ちょうどエジプトの事件だとかサッカーが勝っただとかいうことで、本当は17日に載る予定でしたが、なかなか載らないんでボツになったかなあと思ったら大きく載せていただきました。その時に、記者が授業を見たんですけれども、実は図書館に行きましたら、わやわや勝手なことをやっているわけです。しまったなと、もっといいとこ見せなくちゃいけなかったなあという。それから校長室に、連れていくときに、公衆電話がありましたが、公衆電話のところで生徒がごちゃごちゃやってるわけです。電話を前にして。もっといいところ見せないといけないかなあというふうに思っていたのですけれども、記事を見ますとですね、こういうふうな書かれ方をしております。本校の記事です。

「この授業になると、図書館は資料探しの生徒でいっぱいになる。教科書はなく、自分で問題を考え、自分で関係者を捜さなければならないので生徒たちは必死だ。公衆電話の前には、訪問先と約束をとる生徒の列ができ」非常にうれしいです、これは。
(笑う)

こういう面があると、今までの授業スタイルとは違うんだと、ということですね。そのことを書いていただいた。大変うれしく思っております。このことはひとつのニュースです。

もう一つは、お手元にですね、「窓」という図書館報。これも私もぜひ今日紹介したいと思って。実はこれ、出たばっかりです。15日月曜日・・・火曜日かな。月曜日か火曜日に読みまして、これはと思いまして、４ページですけれども、ちょっとご覧下さい。この、「窓」。ありましたでしょうか。実は、この４ページに、生徒の感想文が載ってるんです。「教える教育の敗北」なんですよ、題が。これを見て私はぎくっとしまして、もう一度名前をだしますが、高橋里佳という生徒ですけれども、中２、中３、高１と総合人間科を学んできた生徒です。最後に、彼女は総合人間科について触れてるんです。一番最後の部分。ちょっと読んでみます。

「総合人間科の良いところは、自らやるということと、フィールドワークで多くの人や地域から学び合うところだ。１年間という意外に短い期間ではそのテーマの答えはでないことが多い。それだけではない。学び方も含めて、自ら追求していくので、いつも自分だけが頼りなのだ。今の教育に基本的に欠けているものは、自らやるということだ。自ら学ぶことで、社会や自然に対する視野が広がり、自分というものを見つけ、何がやりたいかが見えてくるのである。」もっともなことです。

しかしそこにはですね、こんなに厳しい評価もあるんだということですね。それが生徒の受けとめ方だったのかなあと、いうふうに思っております。最後のところは、「大切なのは、親や教師が敷いたレールをたどっていくことではなく、自分からそのレールを、自分なりに敷いていく事なのだ。」というふうに結んでいます。私は彼女の中で、やはり総合科が始まっているな、というふうに感じましたし、教える教育に対して生徒たちは、まさに我々教師に対してですね、こういう批判をしてるんじゃないかと。去年、私は高３の方担当しておりまして、先ほど水越先生もいわれましたが、授業の中でやはり生徒たちは、我々の教育の在り方を批判してるんだと。そう思ったわけです。それだけに総合学習の導入には難しさがあると、いうことをまず認識していただきたい。

次にもう一つのニュースはです。ＮＨＫが10月25日に、「総合学習は教育を変える」教育トゥデイというところでやったんですが、ご覧になった方はおありでしょうか。ここで、驚くなかれ、中学の先生のデータが示されまして、「30％の先生が導入に反対」である。こうおっしゃっているわけですね。高校になりますともっとこの率は増えるんじゃないかと私は予測するんですけれども、それはいったいなぜなのか、またここらへんのところはあとでいろいろ質疑をしていただきたいと思っております。保護者の声もありました。これうちの保護者じゃありません

よ。教育トゥデイという。番組の「この理想としては理解できるんだけれども、しかし、」というところがすごいですね。悩みが多いという。

しかしながら、2003年から、一斉に導入されるということになりまして、今から、準備をする必要がありますけども、私の方の話になりますが、要するにこの、導入するにあたりまして、どういう方法が一番いいのだろう。それをお話ししたい。私は自分で勝手に名大附属方式、と名付けているわけですけれども、普通なかなか附属の研究というのは、一般化されないということでいろいろ批判があります。うちの附属は、見てのとおり、ルーズソックスもいますし、ピアスも茶髪もいますから、非常に大衆的な学校だと、いうふうに考えていただいて結構です。中高に取り入れる難しさ、それはどこにあるか。最大の困難点は、生徒ではなくて教師自身だと。これは、まず導入にあたって問題となるのは、やりたい人だけやればいいじゃないか。私はできませんという、そういう職場へはどう切り込んでいくのかっていうことです。不安材料はたくさんあります。外へ出すと事故があったらどうするんだ。けんかしたらどうするの。こういうことをいったらきりがないわけですから、まず、提案としては、まずみんなでやろうという、その、みんなでやろうという合意をしていかないとまずいということですね。全員で取り組むということですね。これは朝の基調報告にもありましたけれども。提案としては、この教科は学校を変えていくものなんだよと。この視点を持つことです。これ本当にやっぱり学校変わっていくひとつの核になると、ぼくは思います。というのはなぜかというと、ご存じのように本校は、学校行事を総合人間科の中に全部位置づけていこうということですから、行事そのものが授業になるわけです。そこから先生の対象がはっきりしてきます。目標もでてきます。そういうことで、脱教室、と我々は言ってるわけですけれども、それを求めることによって教育を変えていく核になるのだと。で私たちはフィールドワークを各学年においているわけです。こういう例がありました。これも新聞でね。うちの学校は広島に連れてってますけども、中３で、うちの学校の例じゃありませんよ。新聞で読んだ話によりますと、語り部が修学旅行の生徒に語りかけたのに、笑いが起こったりヤジが飛んだり、まあとにかく真剣に聞いてなかったという、そういう新聞読まれた方あるでしょうか。あのときにですね、まあ最近そういうこと多いんですけれども、その引率の先生が、一年間じっくり学習したあとに連れていけばこういうことはなかっただろう、というふうにおっしゃってるわけです。したがって、修学旅行等を考えるんでしたら、その、時期と、場所を、総合学習の中身としてとらえていく。それでじっくりと時間を保障して、そこで勉強していく。そういう方法がひとつは公立では取りやすいんではないかと、いうふうに思うわけです。本校はそういうことではじっくり取り組んでいるということですが。

提案の三つ目ですけれど、じゃあいったい、その、みんなでやろう、行事も一緒にフィールドワークとして脱教室でやっていこう。その時に何を教えたらいいのか、ということです。何が、何でもかんでも取り上げれば、総合ではありません。これ生活科と違うわけですから。中高でのしっかりとしたテーマ性を持ちたい、ということです。それはですね、21世紀に向けた様々な課題だとぼくは思います。それが生きる力であろうと。生きる力とは何ぞやというようなことをいろいろ言われるわけですけれども、私たちはサバイバル的な生きる力ではないと、いうふうに考えています。生き残るということではなくって、自分の生き方、人生、それを自覚的に選択する力というふうに私たちは研究を位置づけまして、この日まで至っているわけです。要するに答えが一つではない、ということですね。いろんな立場から、多面的に、いろいろこう、ああでもないこうでもない。あるいは教師も生徒も一緒の土俵に立つ、ということでしょうか。この問題について、そのキーワードは何か。先ほど水越先生もいろいろ言われましたが、こういうものは生命の問題だとか、人権の問題だとか、平和の問題だとか、ということですね。まあ平和といっても、非常に大きな意味での平和、という意味です。

そういうことで、それを学年で一つプロジェクトを作って、やるということです。こういったところに取り組みやすさがでてくると。忘れてはいけないことは、この総合的な学習、総合学習というのは、人との関わりの学習であるということです。関わりを持たない、教室の中や図書館の中だけでやっとっちゃしょうがない。やはり、外に出ていくと。外に出るのが僕はいちばんいいと思います。というのは、今の生徒は、人との関わりを意識的に避けますから。細かなところではいいんですけども、大きな関わりは非常に不得意ですし、それを避けますから、意識的に外に出して、失敗してもいいから外に出していく。そういう学習方法を身につけさせる。これが、自己教育力ではないかと思っております。

時間は、まだ少しありますのでもう少しお話ししたいと思いますけれども。じゃいったい３年間の取り組みの中で何が変わったか、ということですけれ

ども、中学の例だけ話しておきます。たとえば中１。これは、紀要にも書いてありますし、その本の中にもありますが、人との出会いからいろいろ学ぶということですから、いろんなところ出かけていきます。昨年の実践で、小学校の先生のところに出かけていった実践があります。その実践の中で、生徒がこういうこと書いてますね。「小学校に在学中の先生は、いつも僕たちと一緒です。障害児の学年行事の時、先生は涙を流してその子に拍手を送っているようでした。罰当番で清掃の時も、その子だけにやらせないで、先生も一緒になって汗を流して雑巾掛けをしました。先生から優しさを教えていただいたと思っています。そして生きる力を学びました」というふうに書いてありますね。私はこれ見て、あーなかなかすごいこと書くな、と思って（感心）うちの生徒なんですけど感心しました。というのは教師はそこから学ぶことができますね。子どもってここまで教師を見る目が育ったんだと。いっぺん小学校離れてですね、客観的にものを見てくると。やはり子どもから、学ぶことがあるんじゃないかという、今までの授業とは違うような対生徒との関係ができあがっていくという点。そういうプラス思考をしていかないとですね、マイナス面はいくらでもあります。だから、プラスで考えていかないと、教育改革（なり）はできないんじゃないかと思います。中２の生徒でも、私が第１年度に教えた生徒で、なにやっていいか分からんという人がいます。なにやっていいか分からん。で、おまえなにが好きなんだ。魚が好きだ。じゃあおまえ魚はどうだ。毎時間毎時間魚をやればいい。図書館の絵本、辞書、図鑑を出して。それからフィールドワーク行かなあかん。どこ行っていいか分からん。なら漁師のところへ行って来たらどうか、ということで、釣りにその漁師のところへ。で、じゃ漁師のところでインタビューに行くということで、漁師のところへ行って来てから、非常に変わりましたね。発表がなかなかおもしろかったです。これはですね、ハゼを釣ってきまして、あの、木曽川のハゼと庄内川のハゼを釣ってきまして、それをはらわた開きまして、どう違うのかと。きれいな水のところはこういうハゼで、匂いもかすかである。そんなようなことやったりそれから天然のマダイと養殖のマダイを釣ってきて、おまえたちは養殖はゴム食べてんだぞ、というようなところまで見せて、比較して。

結局そこから私はなにを学んだかと言いますとですね、やっぱり、その子は、ここで言っていいか分かりませんが、いわゆる教科の学習には沿わないということです。だから教科でなかなか見つけることができない、救われない子も活躍できる場だと思いました。今、自尊感情とか問題になってますけども、「ああ、俺はやった」というような、そういう充実感といいますか、みんなから認められるということも、こういう学習の中ではできあがってくる、ということです。やり方によっては非常にプラスになっていくということ。ただそれがストレートに、生徒指導だとか、学力に結びつくかどうかは、長いスパンで見るまで決まらない。そういうことで中１中２の例をお話しましたけれども、早くして申し訳ございませんが、高校の場合はこちらに並んでいる３人にいろいろ話していただければいいんですが、要は高校の場合は、人間的な生き方をいかに学んでいくか、ということ。中高の総合的な学習の中で一番大事なことは、生き方の問題に連ねていく、ということでしょう。そうでないとやっぱり何のために勉強してきたか、ということがつながってきませんから、それを一つの柱にして、常に人間らしい生き方というものを求めていく、という。やっぱそういう方法がいいんじゃないかなあというふうに思います。教師の面ですけれども、教師はですね、自分の教科を当然見直さなくちゃならない、ということですね。簡単に言うと、自分の教科の問い直しをしたりですね、それから生徒観の問題だとか。生徒の見方を変える。教育用語で言うならば学習観が変わるというようなことになるでしょうか。自分の教科を見つめざるを得なくなる、ということがあります。あと悩みの部分は教師の力量の差がでるということ。これはしょうがありませんね。要するに子どもの興味関心についていけないわけですから。そういうことがあるわけです。これは正直に認めていったほうがいいと思いますね。子どもから学ぶわけですから。

評価の問題も、これも大事です。評価は紀要の方に第２部でまとめておきましたけれども、評価観点をどう出すのかというのはまたお読みください。今までの評価観を変えなきゃだめですね。要するにもう一つは、教師が、表現力を持たなくてはならない。逆に、そういうことで悩む先生もみえました。これはアンケート取った結果ですけれども。ここで計算をたくさんやらしといた方がいいなとか、英単語の一つでも勉強さした方がいいなとかいう、そういう声も聞こえないわけではありません。そこら辺は、開き直らないとこの勉強は、学習は根付かないと思います。後は施設面の問題とかいろいろありますけれども、、教師の役割はいったいなんだろうか。ここら辺も、教師出過ぎじゃないのか、というようなことを私たちは言われたことあるんですけれども、教師の役割は、黙っとるということですね。そうなる

ことが理想だと思うんです。しかしながら、ネットワークをしっかり持ってなくちゃいけない。この子の問題に対するのはこういったらどうだろう、というネットワーク。全校的に広げて持ってないと、うろたえてしまう。ですから教師は常にアンテナを張って、いろいろな展示物などはビデオにとって。ですからかなりえらいことはえらいです。保護者のことですとかありますけれども、保護者については省略させていただきますけれども、一つだけ。高校生から、保護者にアンケート取りました。男の子ですけれども、うちの子はほとんどお父さんと話をしなかった。でもこの総合人間科で、話をするようになった。これは親父の出番なんですね。論文どうやって書いたらいいのかとか。そういうようなことでもって、のめり込みすぎちゃって、徹夜までして困ったとかいうようなのも。それはうれしい悲鳴ですけれども、逆に、大学はどうなるんだ、学力問題どうなのかとかいう。そういう問題、当然つきまといます。そこら辺は我々も自信を持って、そうではないんだと、そういうことが言えるようにならないとまずいと思います。

正面の時計は4分遅れています、ということで、もう私の時間すぎてますので、後1分で終わります。これが一番大事なことですが、憲法第9条も、押しつけ憲法だ、押しつけ憲法だと言ってるだけではだめなんです。自分のことにならない。総合学習も押しつけられた、押しつけられたと言っとっては、それは教師のものにもならないし、生徒もだめです。押しつけられたと教師が思っている以上だめですね。学校もだめだと思います。やっぱり学校が自主的に教育課程をどう変えていくか。そして大事なことは、楽しくやる。そしておおらかに、ということ。あまりにも「これやったからすぐこう」ではなくて、ゆったりこうやっていけると一番いいんじゃないかなと思います。そして、そうやってきたあかつきにはですね、教師の力量は必ずつくんだと。減るものがあるかと、そういう自信を持ってね、やれたらいいんじゃないかと思います。そういうことで、附属方式、と言っていいかどうか分かりませんけれども、名大附属方式。ぜひ、広げていっていただきたいと思います。以上です。（拍手）

槙本　ありがとうございました。ご質問等あるかと思いますけれども、後でまとめてディスカッションの時間をとりたいと思いますので、引き続き提案者の方に移りたいと思います。次は共同研究者として3年間、この総合人間科を見ていただきました、的場先生よろしくお願いいたします。

的場　テーマの方は、学級で起こる小さな変化の持つ様々な可能性ということにさせていただきました。この、附属の総合人間科の中では、少しの変化が、具体的な授業現場であると思っているわけですね。その小さな変化の中に実は、いろんな意味があるのではないか。そこのところを提案したいと思っております。

私は一番最初に、高3の、今日ここにいらっしゃる、本間さんが司会をして、渡辺さんが発表するのを見ました。彼は父親からずっと、小さい頃から博物館とか城とか、そういうところにつれて行かれた、ということと、自分の興味があったということから、歴史に興味を持っていらっしゃるんですね。そして、学外講師の方が来られて、そこで非常に感銘を受けた。学外講師は父親だっていいわけですね。父親のことについて。私が感動したのはですね、歴史は人間が作ったもので、その中でいろんな試行錯誤があったんだろう。その試行錯誤をずっと詰めていくことで、自分が将来、どういう選択をやっていくのか、ということの参考にしたい、ということをずっと述べてきたわけです。そして、途中から来られた丸山先生に、質問が終わった後に、先生一言となりまして、先生の方は半分、教師の本音が出たかもしれないですけれども、そういうふうに言う。

まず最初に、水越先生が言われた、一番私が気にかかったのはですね、いろんなやり方があるだろう。卒論と、一斉授業と、総合人間科の間では、いろんなやり方があるだろう。そこのところを、教師と生徒との関係が非常に変わっていく。そのいろんな変わり方があるだろう、ということがあるわけですね。私は、一つはですね、ここにレジュメがありますけれども、そのことはどのところですか、というと、5番目の方の裏になりますが、3ページの5番のところに、教室から地域へ、という具合に書いてあるわけです。これは、脱学校論、脱教室として位置づけられているわけですが、私はそのあたりに副題をもうけたいわけです。学習過程の流れが必然的に学校から地域ということなんです。どういうことかと言いますと、普通ですと、地域へ出かけよう、いろんなところへ出かけようという具合にして、まずは、最初に地域がある、という考え方ではなくて、ここの実践の場合には、私は、どういうことが大事かというと、授業の過程の中で、必然的に地域の人と関わり合わなければならない。そういうものがまず、あると思っているわけですね。授業展開の中では、いろんな方向に授業が進んでいくと思いますが、その進んでいく中で、地域がそこに関わっていく必然

性。そういうものをまず大事にしておかなければ、地域のための研究。それが最初にあって、それから後から、地域に出かけていけばなんとか出来るだろう、ということがある。そして、ここにも書いてないわけですが、もう一つ申し上げますと、２年目に、一緒に協力して授業を見せていただいたときに、養護の先生がおられました。養護の先生が、こう言われるんですね。「研究発表の時間になると、よく、何人かが、養護の部屋に駆け込んできて」と言われるわけです。これは、やはり、国語で発表するということがですね、書く、その何かに書いてまとめるということで、その作文が苦手だということですね。本学の心理学の先生が、各教科の点数と、総合人間科の、相関関係を調べたときに、どういうわけか知らないけども、国語との相関関係が高い、ということを言われたわけですね。総合人間科は、国語ができればいい、ということは、どういうことかというと、表現がうまい子、国語で表現がうまい子なんですね。そのときの子どもが話題になりまして、学校の先生方とはもう少し表現の幅を広げてみたらどうかと。どういう子がいますか、ということの中にですね、ダンスのうまい子がおる。先生、どうですか、一回ダンスで表現させてみてと言うとですね、非常に無理難題を用意したこともございますけれども、それが一つですね。一番大事なのは、先生方が放任してない、というところですね。学習指導のところでは、徹底して生徒たちに言ってきて、指導してください。むしろ、発表の時にはゆっくり任せて、後ろで見てください。発表の時には、先生方は、後ろからそっとしておく。しかし、調べ学習の時に、陰に回ったときは、徹底して指導してください。陰の部分は見えないわけですが、今日は発表の花として、はれの努力が見えているんじゃなかろうかな、と思っているわけです。

で、もう一つですね、私は、人との関わり、ということですが、その、４番目の、地域の人との出会い。友達との学び合い。私はこれは、居場所の形成の一つの重要な提案だったのじゃなかろうかなと思っているわけです。郡上八幡まで、水の研究に行った子どももいます。一番最初に事例として書いてますが、三重の納豆工場までわざわざ行った子どももいます。大学の研究室にも、たくさん出かけております。メタニンってどんな色だろうか。この場合、農学部の卒業生の先生がおられましたので、電話一本でそこの研究室に行きまして、メタニンの色を見せてもらったんですね。こういう具合にして行ってるわけですが、この納豆のことで言いますと何人かが納豆のことを調べているわけです。ある子どもは、納豆のことに対して、まあそうたいした興味は持たなかったけれども、ほかの子どものとの討論で、実際に行ってみて、だんだんと深まってきたわけですね。そういうと、討論とか調査の中で、自分がだんだん深まっていく。ということがあります。で今日ですね、ここの途中の書いてあるのは、司会なさっている槙本先生が書かれたものです。これは、高校になって、入試対策で、何か小論文のために、どういう対策をしてるかが前提となります。そして、その話を聞いた後にですね、こういう具合に書いてらっしゃるんですね。「真の学力を目指し、３年生になって１、２回の講義を聴いて、自分の考えを構築せよ、と言っても無理じゃないか。真の大切さは自ら学ぶ、そして、学びあう仲間を持つことで、真の学力が付くんではないでしょうか」これはちょうど、そこにまだたくさん余ってると思いますが、「サバニ」という通信の中に書いてあることです。これは、私は、学びあう仲間と真の学力ということが、結びついていることは、非常に大切なことですが、もう一つは、学びあう仲間がおる。先生方が親身になっていろんな調査の手助けをしてくださる。ときには、その人の悩みという部分を解消してくださる。子どもたちの選んだテーマを、確かにおもしろいけれども、自分にとっての切実な問題を持つ。今は、たとえばアトピーのことを調べている学生がおる。それは、自分自身が少しかかっているからですね。過食症の子どもがいる。このことをですね、佐伯氏、東大の佐伯さんが、「もう一人の自分というものがあって、その現在の私をいろいろ補助し助言し、時には優しく支配し、反省を迫り、変身を迫るものが、非常に大事である。そして、その自分の、本当の自分がいるか。そのものを手助けしてくれる、親身になってくれる神というものがおるんじゃなかろうか」という具合に書いてらっしゃるわけですね。ここでは、先ほどありましたけれども、丸山先生は、教師と子どもの関係が変わって、子どもから学ぶという具体的な姿は何かというと、私はほんとの自分を勇気づけて、いろんなことで手助けしてくれる、親身になってくれる人がそこの中におる、ということだと思うんですね。もし、人生の中でそういう人と知り合って、もっと知る世界が広がって行くんだろうと思っているわけです。総合学科は、総合人間科はですね、そういう意味では、そういう可能性を秘めてるんじゃなかろうかな、と思っているわけです。平凡なようですけれども、受験の競争ではなくて、今日もありましたけれども、パネルディスカッション的には、それぞれの、批判を見つけてやりこめるんじゃなくて、認めあい、お互いに共感できる形で

行きましょうといっていましたけれども、そういう問題をそれぞれが持ってるわけですね。そして、そういうものを共通の問題として親身になってくれる教師とか、友人とか、地域の人々が出会うということは、一つには、その人の居場所を形成してくれる。学級でできればそういう友達、先生がおるということが、大事なことではなかろうかなと思っているわけです。

もう一つは、3番目に少し入りたいと思うんですが、丸山先生の方から、高橋さんの文章がでました。そのことを聞いて、生徒の追求対象の方向性が変化していった。私は、自分の問題の切実さということと関係づけて提案したいと思っているわけです。事例の中にある、この納豆の研究。この子どもは、賞味期限の表示が変わるということを考えてから、追求が始まって行くわけです。いろんなことを考えていくうちに、そういえば納豆ってはじめから腐ってるのに、どうして納豆に賞味期限があるんだろう。そういうことを疑問に思って、三重にある、こすぎ製造所のところに行ってるわけですね。ほかの子どもたちでは、ここに書いてありますように、武士とかパレットとか美濃紙とかしょうゆとか。中学校1年生には、先ほどあげましたけれども、恩師のところへ行ったりしてるんです。高校1年生は、「生命と環境」という大きなテーマの中で、差別の問題、アレルギーの問題、モラトリアムですと、そのことを扱ってる心理学の先生のところに行ってらっしゃるわけです。そういうことがどういうことがあるかというと、私は、そのことをして、何になるんだろうという、子どもたちがストレートに素朴に感じている、そういう問題が、追究対象としてなってると思うんですね。そして、その中2の納豆の例を申し上げますと、ある生徒は何となく納豆を調べようと思ったわけですけれども、納豆工場を訪問したり、納豆の作り方や理由について追及するように来たわけです。もう一つはですね、後の方に例がありますが、高校3年生のある生徒は、自分の進路を決定するきっかけが、高校1年生の野外学習の老人ホームの訪問だったと言ってるわけです。家族の人がじゃま扱いしてることと、介護の仕方がわからないので、ホームに入れてしまうという事実に驚いています。そして、介護の仕方がわかれば、一緒に暮らすことができるんではないかと彼女は思って、次がおもしろいですね。考えているだけでは問題の解決にならないので、私は行動に移すことにしました。この考えは高3の今、進路を考える上で、はっきりとした進路選択になりました。あれこれと、いろんな助言も、ほかの子どもたちの反応もありますが、この子どもの中でですね、幾分か、私たちが非常に間接的に結びつけているものをですね、ストレートに結びつけている。そういうことがありますが、私は、ただ単に関心があるだけではだめで、こうやって長い歴史を経てきてですね、徐々に醸成していく。そして自分の思っていることをですね、社会のことをあきらめずにどうしてそうなんだろうと突き詰めていく。その突き詰めていく中で実は、自分にとって、のっぴきならぬ、切実さというものができるんではなかろうかな、と思っているわけです。次の文章は、少し突飛なようですが、こういう文章です。切実さというものが子ども同士の論理の響きあいによって、子どもの心に満たされて行くんだという点をまず指摘したが、この響きあいをですね、支えるものは、自分が家族や地域の人々とともに生きているという重松先生の言葉で言う共感の感情ということを言ってらっしゃるわけですね。長いうち、1年生2年生3年生を経てきて、そういう子どもがおるということですね。そういうところの転機があるんじゃなかろうかな、と思うわけです。　（拍手）

槙本　ありがとうございました。さて次は、実際に総合人間科の授業を受けてきました生徒たちの声を聞いてみたいと思いますが、授業の中では、教師が生徒を評価するというようなことと、生徒自身が自己評価をする。さらに友達同士で相互評価をするっていうようなことをしてますけれども、生徒が評価を評価するというのが、先生が学校を評価するというような面もあるかもしれません。実際に授業を受けた立場から、発表していただきたいと思います。最初に今年の春卒業して、現在愛知教育大学の大学1年生です。総合人間科は3年目ですので、彼女は、高校2年と高校3年の2年間、この授業を受けたわけですけれども、今、教育の道を目指しているということで、その立場からの発言もあると思いますので、大学生となってこの授業をどう考えるかいっていただきたいと思います。お願いします。

木村　木村といいます。お願いします。私は、名大附属で2年間総合人間科の授業を受けてきました。高校2年生の時は、実際に沖縄に行って、米軍基地問題について考えました。そのときは、米軍基地に入って、米軍の方のお話を聞いたりもしました。そのとき感じたことは、沖縄は、アメリカにオキュパイドされている。つまり、占領されているんではないか、と考えました。高校3年生の時は、自分の生き方について考えてきました。2年間この学習を受けて、私は社会の動きに興味を持てるようになって

きましたし、自分の将来について深く考える機会を持つことができました。私は、高３の時に教員になりたいと考え、教育問題について深く学ぶことができました。今は、自分の考えていた進路に運良く進むことができました。でも実際には大学に行ってみると、周りの人間とのギャップに驚きました。友達には進学校出身の人がほとんどで、なんの考えもなく、「入れる学力があったから」とか、「先生に勧められたから」とか、そういう理由で大学に入ってきた人が数多くいます。教員養成の大学であるにもかかわらず、私の調査によると、約２０％の人しか教員になりたい、と言って入ってきた人はいません。この背景には学歴社会があると思います。幼稚園は小学校の授業を先取りするため、小学校は中学校のため、中学校は高校受験のため、高校は大学受験のため。では、大学はなんのためにあるのでしょうか。それは、いい企業に就職するためではないでしょうか。つまり今の社会では、大企業に就職することがすべての目的で、一番優秀だと思われる人だと言っても過言ではないと思います。また友達のほとんどは、社会の動きになんて興味がありません。私がたとえば、「昨日の新聞見た」とか、「昨日の橋本首相の発言聞いた？」とか聞いても、「ノー」という返事しか返ってきません。説明してもなんの興味も示しません。こんな教育でいいのでしょうか。こんなに問題意識のない人ばかりがたくさん育っていいのでしょうか。私は今日、偏差値の高い高校出身の、同じ大学の友達と公開授業を見て回りました。友達は高校３年生の公開授業に一番感動してて、「あんなにはきはきと意見を述べれる人とか、生き生きしている人は初めて見たし、人生について今まで考える余裕もなかった。自分の周りにはなんの夢も持たずに、入れるから慶応大学、入れるから東大、という子ばかりだった。それで自分の夢のためにカンボジアに行ったり、オーストラリアに行ったり。行動に移せる子もいなかった。名大附の生徒は、違う人種のように見えた。この授業は人間形成豊かな人生を送るためには必ず必要だ」と、そう言っていました。私もそう思います。ただ行けるから、入れるからというふうに人生を流してしまうのでは、人生はつまらないと思います。ただこの総合人間科を行うためには、ゆとりが必要です。ゆとりがなければ、考える時間が生まれてきません。そのためには、受験戦争をなくすことが必要だと思います。私は６年間この名大附属にお世話になったんですけど、入学した動機は、親の薦めです。それまでの私は、親の言うことを聞き、親の言うとおりにしてきました。しかしこの６年間のゆとりのある学校生活の中で、自分自身を見つけることができた、と思います。そして、親やその他の人に、意見することもできるようになりました。それは、先生のおかげでもあると思うし、総合人間科のおかげでもあると思います。私は高校３年生の時に、先ほどお話ししましたが、教育の問題について考えていました。私が今の教育を変えていきたい、と強く思っていました。しかし、実際、今周りが全然問題意識ない人ばかりで、何も一人では変えれないなというふうな、無駄な気持ちでいっぱいです。たとえば、教育原論という授業で、今の教育は取り締まり的管理主義教育だからとか、制服問題についてとか、職員会議は諮問機関であるとか、いろいろ話を聞いたりとかしてるんですが、そういう話を聞いても、私の周りの友達が何も関心を示さないし、「自動車学校のコースを覚えなきゃ」とか言って一生懸命覚えてたりとか、そういう子ばっかりで、全然授業に参加してないんですよ。私が一生懸命勉強してても、「何でそんなにまじめに受けてるの」っていう感じで見られている状態です。今までは総合人間科のいい点ばかりしゃべってきましたが、もちろん悪い点もあると思います。たとえば、私たちは自分の進路について一生懸命考えてきたんですが、実際行きたい大学に学力不足で入れなかった友達も多くいます。それは、一生懸命今まで考えた１年間が結局は無駄になってしまってよくないと強く思っています。ほとんどの生徒が２年間の総合学習を終えて、自分の意見をはっきり言うということを身につけてきてると思うんですよ。たまには言い過ぎることもあって、たとえば、「あの先生はこんなに大切な話をしてるのにいびきかいて寝てやがる」とか、やっぱり言い過ぎることもあると思うんですけど、でも言えないよりか全然いいと思うんですよ。最後に、最近は神戸の事件とかいじめとか、教育にいろいろと問題がありますよね。私はその解決法として、今までの話とは全然関係ないんですけど、少人数制クラスの導入を提案します。そうすると、先生も一人一人の生徒を少しでも多くみれると思うし、生徒もたくさんの教師とか、大人を見ることによっていろいろ学び取れると思います。私が教員になる頃には、今よりもすばらしい教育が行われていることを望みます。以上です。（拍手）

槙本　ありがとうございました。いろいろ問題点もでてきたと思いますので、後のディスカッションが学力保証ですか、そんなことも話題になるかと思います。次は、実際に現在、その進路に直面している３年生で、先ほどの公開授業でパネリストですとか、司会を担当しました生徒を二人、発言者として。先

ほど紹介があったんですけれども急きょピンチヒッターということですから、こちらもとしても不安があるんですけれども、生の声ですので、そのまま素直にお聞きいただければと思います。最初に、3年間どのような授業をしてきたかというような紹介も含めまして、渡辺索君、よろしくお願いします。

渡辺　渡辺でございます。生の声でお話しさせていただきます。(笑い)

3年間総合人間科の授業を受けてきた、というか参加してきたわけですが、3年間をご報告したいと思います。1年生で入学したとき、総合人間科という授業が始まりました。この1年は個人研究の1年だと言われて、個人で好きなテーマを決めるよう言われました。それぞれが自分の好きなテーマを決めて、その後そのテーマごとよく似たとか、同じ系統のテーマの人たちが集まって、グループを作って、それぞれの指導教官の先生の元に集まって、話し合いをしたりしました。それで高校1年生の時に覚えているのは、メインイベントと言ってもいいと思うんですが、野外学習がありました。1年生の時各テーマに沿って、自分のテーマで知りたいことを知る。自分の行きたいところ、意見を聞きたい人を決めて、そこへ行ったわけですが、僕は、自然というテーマを持っていたので、瀬戸で行われる万国博覧会のことを、2005年万博のことに興味があったので、それを調べたいと思ってそこへ行きました。行ったのは、県庁の万博誘致対策局と、片や万博には反対であるという立場の、ものみやま自然観察会の方のところへ、お話を聞きに行きました。二つの立場の方々からお話を聞いて、万博を開くとはどういうことか、自然環境を守るとはどういうことなのか、ということを、二つの立場から学ぶことができました。そうして高校1年生の時はそういったテーマ別の、自分のテーマに沿った研究論文を最後に完成させました。その後、僕は自然環境について、自然環境をテーマにした、3人の友達と一緒に少し話し合いをしました。話し合いといっても、悪口の言いあいみたいな感じで、おまえの意見は甘いとか、おまえの意見は間違っているとかいったようなことで、けんか寸前の話し合いを、討論をしました。そんな思い出もあって、高校2年生に進級しました。高校2年生は、沖縄の研究旅行が控えている、ということで、旅行委員会が発足し、旅行に向けての準備が始まりました。ここで生徒の間からこんな意見が出ました。「先生は黙っとれ」とまでは言いませんでしたが、僕たちは総合人間科で学ぶに当たって、「ぜひ先生たちはアドバイザーに徹してほしい」。僕たちが自主的に決めていきたいんだ、というふうに発言がありました。そのことを旅行委員会で先生に申し上げたところ、どうぞ、というふうに、なんて言われたか覚えてないんですが、自主的にやっていいということでしたので、僕たちは、旅行の様々な事前の準備を自主的に行うようになりました。そして、沖縄研究旅行前に、ディベートをしました。沖縄に、米軍の基地があるのは、是か非かという問題でした。あ、違うわ。全然違いました。大筋ではそうなんですが、沖縄は独立すべきか。日本から独立すべきか、という議題でした。忘れてたんじゃないですよ。ちょっと混乱しただけです。そうやってディベートを経験し、様々な事前の研究を行った後で、沖縄に行った僕たちは、沖縄戦の跡をまざまざと見せつけられて、様々な思いを胸に抱き、高校3年生に進級しました。高校3年生では、自分の将来の進路に絡めたテーマを決め、そのテーマに沿った各系統別、人文系であるとか、理系であるとかといった系統に分かれて、それぞれのアドバイザーの先生のもとに、話し合いをしたり討論したりしました。そして学外講師を招いて、自分たちの進路に関する助言、あるいは今の社会の中でどういうふうなのか、というお話を聞きました。ちなみに私のグループに来た講師は、父でした。学外講師を招いた授業の後、今日のパネルディスカッションを迎え、私たちは、困りました。自分たちの考えをどうやって、今僕もすごく緊張しているんですが、人の前で話すというのはとても難しいことだと思いました。無事、今日のパネルディスカッションが終わり安心していますが、僕が考えているのは、こうして3年間本当に充実した総合人間科の授業を経験してきましたが、目の前にあるのは受験です。3年間総合人間科を受けて、これからの自分の生き方に大きな影響があると思いますが、目の前には受験があります。この状況はいったいどうなるのでしょう。以上です。　(拍手)

本間　言っていいですか。

本間　やっと回ってきました。しゃべりたくてうずうずしてたんですよ。総合人間科の申し子の本間です。よろしくお願いします。僕は今まで、渡辺君が何をやってきたかをお話ししてくれたので、それでは実際生徒にとってどういうものだったかという本音を、言います。先生たち、その辺の配慮をよろしくお願いします。まず、メリットから。一番のメリット、総合人間科をやってきてよかったと思ったことは、自分で自分のことを考えるという機会があったということだと思うんですね。この総合人間科と

いうのは、普段今まで受けていた数学とか国語とかそういう授業ではなく、自分で何かをしないと学べない、ということがあったので、自分から何かをしようと、そういう努力をする力がついたと思います。これが何よりも一番だと、僕は本当に本当にそう思ってます。後、ほかに何がよかったかと言いますと、これは、僕が１年生の頃個人研究をやっていて、僕は実は、将来映画監督になりたいと思ってまして、映画について、僕はずっと研究してきました。それでですね、僕の友人がですね、そのグループ男二人しかいなかったんですけど、そのもう一人の男の子が、自立について研究すると言ったんです。その自立について研究するって言った友達と僕は、男二人だったんで、どうしてもくっつくようになってしまって、それじゃ、二人で映画に近いことを、一緒に映画を使ったらどう、ということで、その友達は、寺山修司という方をご存じですか。その昔の天井桟敷をやった方、「家出のすすめ」とかいう本とかいろいろそういうのとかを、研究するって言ったその友達と一緒に、映画を見たりとかしたりして一緒に共同でやってきたんですね。それで、僕がいろいろ学んだことは、実は僕自分は戦争映画のことを調べていたんですが、今、改めて思うと、僕はなぜかその友達が調べていた、寺山修司の方が好きになってしまいました。だからそうやって他の人の、すごく真剣にやってるから、他の人のすごく好きなこと、興味あることが、自分のものになり始める、というか、すごく吸収できる。すごくこの辺がいいことだったんじゃないか、と思います。

続いてデメリット。これは、今までは結構すごくよかったよかったということばかりでしたが、ちょっとデメリットを言いたいと思います。まず第１に、総合人間科は受験科目にありません。これは、今ここにいらっしゃる方は先生、という立場の方が多いと思うんですが、この総合人間科を一生懸命やってきたからといって、受験でテストで点が取れるという保証は全くありません。面接の時に答える、回答する力ができたというのは確かですが、それ以外の、点では、何も役に立たないという形になってしまうんじゃないでしょうか。それは、本当はこうあるべきではないと思うんですが、そこがいつもみんなひっかかるので、どうしても生徒としては、今高３というときもあって、自分の将来という距離の長いものではなく、まず、自分の行きたい大学という一番近い手短なことの方にどうしても目が向いてしまいます。こういう事実があるので、さっき水越先生とかがおっしゃったように、これは新しい授業だとおっしゃってましたが、ちょっと僕から水越先生に質問なんですが、あの、関西大学の先生として、僕は、赤の方が多いんですね。それでも総合人間科は、この学校で一番くらいの自信を持ってます。そういう僕を、先生は大学側として受け入れることはできますか。　　（笑い、拍手）

どうでしょうか。

水越　いや、大変大事な質問でございますので、一言申し上げますが、先程来から受験受験というようなことがでてます。そして受験に役立たないということがでてますが、自分の今勤めておる大学では、明日、あさっても試験があるし、先週も試験をやってるんですね。帰国子女とかいろんな人の試験をやっております。もう終わったから申しますが、帰国子女の試験は、10のキーワードを与えて、その中から二つだったか三つを選んで文章を書く。これが一つ。それから後は、二人の教官の前で、10分間の、その内容を元にした、いわば質問に答える、という試験を現にやっております。朝の９時から始めて、夕方の４時半までかかりました。ですから、受験というのを、名古屋大学とか、東京大学とか、大阪大学というところの試験だけをお考えのようでございますが、受験というのは全国の大学というのはいろんな受験の方法を採っております。またそうじゃないと、大学が生き残れない時代にもなってます。それから、受験して入るだけが問題ではないんで、大学の中で、先ほど、女性の方が言われたように、自分の問題意識を持たない学生と持つ学生は天と地の差がでて参ります。そして就職試験だって、要領よく自分がリハーサルしてきたことをそのまま言ったとしても、もう審査官というのは、百戦錬磨でございますからいっぺんに見抜きます。自分の考えを持たない人は徹底的に叩きのめされます。それで、また大学に行って、どうしても自分はこの大学とは違うと思ったら、もういっぺん私のようにやり直したらいいじゃないですか。私は大学をいっぺん行って、卒業して一年勤めてもういっぺん名古屋大学に入りましたし、そこにおられる私の友人の日比さんは、卒業されて一年間就職されて、もういっぺん大学院に入ってます。彼は同じ大学を受けてますが、私は大学変わりました。学科も全く変わりました。だからとことん、私は三十歳までは、自分のやりたいことを追求する、そういう信念を持って行くべきではないか、と思います。だから関西大学がどうの、ということを言いますが、関西大学は、企業ランキングでは、だいたい15番目くらいからちょっと落ちて18番目くらいの、ランクで入っているとこです。550の大学の中で。その中で私どもは、採用するときに、

一番大事だと思うのは、やっぱり自分というものをしっかり持って、問題意識を持ってくれる人。いうことを、どうしたら得られるかということを考えてやっております。正規の試験よりもむしろ、途中から入る人、あるいは帰国子女、外国人留学生。そういう人たちの試験に今それをやっておりますが、決してこういうような、総合人間科は受験科目にないから役立たないというのは、現実をもう少し正確に見ていただきたいと思います。

本間　ありがとうございました。後もう一つ話したいことがあるんですね。この総合人間科は3年間やってきたのは今高3の僕たちだけなんですが、3年間通じて本当に思ったことは、これを、アドバイザーという形に変わってしまったんですが、学校の先生というのは、この総合人間科をどう思っていらっしゃった、というか、率直に言いますと、総合人間科を授業と思ってない先生がいるから、そんな先生に教えてもらっている生徒は、全然やる気もでません。全然話が進まないんですね。これもう3年間やってきたからやっと言えるんですけど、でも今司会やっていらっしゃる槙本先生とか丸山先生とか本当に熱心に、話し合いをしたらちゃんとすごいいい回答を僕たちに返してくれたりしたんですが、そうでない先生もいるんですね。名前とか言えないんですけど。本当に僕は今まですごく感謝してきた先生と、現実ばっかりというか、そういう人たちの間で生徒はもまれていたんで、その中で、今までの発表とかというかそういうふうにここまでたどりつかせれた。というのは、ほんとに一部のがんばった先生と、そしてまた一部のがんばった生徒だけではないかと思うんですね。今日の僕のやったパネルディスカッションもですが、ぱっと思うと、3年間ほとんどこういうふうに前に出てきてしゃべってたメンバー変わってないんじゃないかと思います。ずっと何もしない人は何もしない。一生懸命やる人は一生懸命やる。先生も一緒ですよね。やっぱり総合人間科を授業として取り入れるんだったら、がんとした、しっかりとした教育方針を持って、僕たちに厳しく、そして優しく教育していただきたいと思いました。後、総合人間科をやって思ったことなんですが、この学校の人数はとても少ないんですけど、自分の夢、というか僕がたとえば映画監督になりたいっていう、渡辺君が歴史の学者になりたいっていうように、その自分のやりたいものを持ってるという生徒がすごく多いんじゃないかと思いました。これは、ほんとに人数少ないけど割合的にいうと、名古屋市のどの学校よりも多いんじゃないかなと思います。僕の友人では、自転車のロードレーサーになりたいっていう人とか、本格的にピアノをやっていてイギリスでの学校を目指している人とか、普通この学校でなかなかそういうのはないと思うんですね。それでもそういうのがたくさんでてきたっていうのは、ある意味この総合人間科があったからではないでしょうか。と思います。だから、ちょっといいですか。ちょっと制服を脱いで、今までは生徒の声として言ってたんですが、ちょっと僕個人としてちょっと言いたいことがあります。僕個人としては、この授業がすごく好きです。ほんとに、初めて、初めて成績がよくとれた授業だと自分でも思ってます。あの、大学の受験とかでも一芸推薦とかよくありますけど、ほんとにこういうのが取り入れられるようになったらいいなあと思います。せっかくこんだけやってきて、見せる場がこの、今日ここでしかないというのがすごく残念なくらいで、僕の受ける大学の人にこの撮ってるビデオとか送りたいなという。
（笑い）
それくらいあれなんで、はい、そんな感じでした。僕がこの、もし、この学校を作っていく立場だとしたら、この総合人間科を何よりも優先させると思います。そのかわり、忘れちゃいけないのが、さっき言った、あれですね。土曜日の時間が、2時間総合人間科に使われるということによって、やっぱり基本事項の学科の面が、努力しづらいということになるっていうのも、それも現実なんで、それをどういうふうに改めていくかも、今後の問題だと思います。あと、大学の先生も今日はいっぱいいらっしゃるということなんで、大学の先生も、こういうことをやってる高校生がいるんだということを知っていただきたいと思いますし、こういうことをやってる生徒が、どれだけ強いか。そこまでわかっていただけたらいいと思います。ほんと僕は頭が悪いんで、勉強ができない分これですごくカバーしたいと思ってます。僕の願いを叶えてください。以上です。ありがとうございました。（拍手）

槙本　ここまで本音が出るとは思ってませんでしたので、本当に評価されてしまったなという気がしますけれども、また後ほど、教師の力量とかそういうのディスカッションの題材になるのではないでしょうか。では、文部省の方から、鹿嶋調査官に、研究開発に3年間見ていただきましたので、お話をいただきたいと思います。

鹿嶋　こういう発言の場で、実際に勉強されてきた生徒さんの後に文部省というのは非常に、私として

はもうほとんど発言する余地がないのではないかと思うくらい実は、立場が、順番が悪かったと感じております。

私は名大附属の高等学校が、文部省の研究開発学校の指定を受けて以来、今年で３年目。ずっと関わってきたものの一員として、総合人間科の意義を研究開発の意義を振り返りながら、二つばかり大きく分けて提案させていただきたいと思います。この総合人間科の実践に学んで、できる学校は、明日からとは言いませんが、来年からでも取り組もう、というのが一つであります。中学校の現在の学習指導要領上の、位置づけからいいますと、取り組むというのは難しいかもしれませんが、おそらく、高等学校の先生方はご理解いただけると思いますけれども、現在高等学校では、その他必要な教科、科目として位置づければいいですね。これは、１年生でも２年生でも３年生でも、内面から取り組める、という実践内容であろうと思います。指導要領上に記載されれば、来年からもできるということを含めて、実施していただきたいということが一つの提案で、もう一つは、これからちょっとお話申し上げますけれども、この実践を、今度出ました教育課程審議会の中間まとめの、総合的な学習の時間と関わり合わせて、その意義を考えてきましたが、それとは別にですね、青年期における人間としてのあり方とか生き方作りの視点から、この意義を唱えてみようというのが、この提案であります。その二つを提案する、という意味でお話を申し上げたいと思います。

まだ先生方はこの名大附属の３年間の取り組みについて、詳しくはごらんになっていないと思いますし、また教育課程審議会の中間まとめも月曜日に出たわけですので、全文をお読みになっている方もいないかと思います。それでその意義を少し、私の方から述べるというのはちょっと無茶なところがあるのかもしれませんが、まず最初に研究開発学校としての３年間の取り組みの意義をお話ししたいと思います。そもそもこの研究開発学校というのはですね、文部省が行う研究指定の一つなんでありますが、現行の学習指導要領にとらわれない、先行的な取り組みを研究していただく、研究実践していただく。そしてこの研究実践を将来におけるカリキュラムの改善に行かす、そういったようなねらいで、この研究開発学校が位置づけられていると思います。その指導要領の枠にとらわれないということは、指導要領の枠をはみ出してもいいというわけですから、将来のカリキュラム開発に役立つようなことを、ぜひ大胆にやってほしいというのがこの開発学校です。そういう視点から見ますと、今回の名大附属の、あるいは名大附属の中高校のこの総合人間科の取り組みが、水越先生のお話にもありましたように、今回の教育課程審議会の中間まとめで示されました、総合的な学習の時間の、一つのモデルを提供したんではないかなと。教育課程審議会の答申は１年後になると思うんですが、確信はしていませんが、私も良く知らないんですが１年後に出て、その後学習指導要領改訂されて、その全国の小、中、高で総合的な学習の時間を実施するというときになって、いったい何をどうやればいいのと、いうときのモデルをですね、提供していただいた。しかも、今回私は、前半の発表会に加えて、校長先生を中心として、こういった本にまとめていただいたというのは、これはほんとに、具体的な、各学校が今度本当に取り組むときにですね、実際上はそんなにうまくいかないと思うんです。そんなにすぐ、うまくスタートできない、ということの中で、うまくスタートするための、一つの典型的なモデルを与えていただいたという意義があるのではないかというように思います。どうしてそう言えるのかといいますと、今回のですね、教育課程審議会の中間まとめは、総合的な学習について、少し細かく分けて考えればほんとはいいのかもしれませんが、限られた時間ですのでまとめて言いますと、たとえば国際比較、環境とかですね、福祉などのテーマで、教科の枠にとらわれない、横断的、総合的な課題について、体験的な活動や、問題の解決的な学習として、地域の教材や学習環境を積極的に活用して行う学習。そのための時間なんですね。このことは、先ほど水越先生の方からお話がありましたので、特に繰り返しませんが、この名大附属の中高等学校、総合人間科として取り組んできた内容、方法、指導の形態までも組み込んでいいのかもしれませんが、教育課程審議会の中間まとめで示した、総合的な学習にオーバーラップしてくることですね。そういう意味で、本当に総合的な研究をしていただいたと思います。

加えまして、実はこれが２年目の報告書なんでありますけれども、目次を見る限りでは、評価の問題も、どういうふうに評価していくのかという、その、評価のあり方もあわせて示していただいている。もし、もし、この学習の意義を十分理解した先生方がいらっしゃったら、ほんとに、来年度からでも取り組めるほど、書いていただいてるな、具体的なことにも提供していただいた、ということであります。えっと、具体的なことということでもう一言言わさせていただくと、実はこれ指導過程としてはかなり難しい面があるんです。どうやって生徒に学習の動機付けをしていくのか。自分でテーマ決めろとこう

言ってもですね、そうは簡単にすぐ生徒がのってくるわけではない。先生方はこの指導の過程で、どう生徒に関わっていくか。教育課程審議会の中間答申では、主体的創造的な学習態度の育成などをねらいにあげてるんですが、しかしそうは言っても先生方どうしろと言うの？、本間君の発言でもありましたけれども、これをどう関わっていくかによって、生徒が、ほんとにこういった学習に取り組めるかどうかの、分かれ道にたたされるということの意味で、関わり方、先ほども丸山先生からお話がありましたように、関わり方の問題。実際その関わっていく中で、何がどういうところで指導する側の教師が困難を感じ取るか、という問題も実は出てくるだろう、いうように思っております。なぜ私こんな詳しいこと言うかというとですね、実はこの、こういった課題解決的な学習は、今回名大附属の中高が取り組んでいただいた総合人間科だけではなくて、すでに高等学校ではですね、職業学科の課題研究という科目として、実施をされている。またその、名前はよく聞くんですが、総合学科という新しい学科がスタートしておりますけれども、その総合学科の中にも、最終学年における科目として課題研究というのがあるんです。実は私は、火曜日から今日まで、名大の教育学部をお借りして、総合学科の新科目、課題研究を含めてですけれども、新科目の、実技指導講座というものをやっておりまして、今日はその、課題研究についての、総合学科における指導のあり方の勉強の日になっておりました。午前中はそちらの方におりましたので、実際に小学校の先生方や発表してる先生方が、どういう、たとえばこんなことが問題になるんではないか、という発表がありましたけれど、実はそう簡単ではない、ということを含めて、だけど、その、名大附属のこういった実践に基づいて、やろうと思えばやれる、具体的なものが示されたと思っております。

２点目は、先ほどの青年教育として見なおしてみようということのところですが、今日はこういったたくさんの資料をいただいた中の、ポイントになるところだけ。名大附属の中高校は、中学校１年生の学年の大テーマとしては「生き方」に始まって、高校３年の最後の大テーマが「生き方」で終わるんですね。その間に、生命、国際比較、あるいは平和と。いったようなテーマが、各学年に大テーマとして設定されている。なぜその、青年教育として、という言い方をしたかといいますと、青年期には、私は専門家ではありませんので、少し先ほどの、本間君の発言を利用させていただくと、やはり中高の青年期にあって、子どもたちが、自分自身を見つける、見つめるとか、あるいは友達との人間関係のあり方を見つめるとか、親との関係を含めて、他人との関係を見つめるとか。あるいは、自分なりに社会に関わって、社会の問題を見つめ、自分はそれに関してどうなるのか。将来自分が、その問題に対してどう、解決の問題を出そうとするのか。あるいは自分なりに参加しようとするのか、いうことは、やはり青年期における中高等学校の教育の大きな課題だと思っているわけです。そうしますとこの名古屋大学附属の、中学校が「生き方」というところで始まって高３が「生き方」というところで終わる。その中間における、今日日本の社会が抱えている様々な問題をこのテーマにして、生徒たちがそれを見、問う、自分の課題的な学習として取り組んでいくことによって、自分なりにも何かそれに対する答えを出さなくてはいけないということが、やはり青年教育として非常に大切なことだと。そうだからこそ、やはり目的意識のある進学ということも生まれてくるんだというように思います。この問題について言いますと、私は、ある意味で大変な危機感を持っています。それは、総務庁から５年に１度、世界青年意識調査っていうのを実施してますが、比較的最近出たのは平成５年のものだったと思うんですけれども、11カ国の18歳から25歳までの、若者の様々なことがらに関する意識調査をしております。その調査項目の一つに、「あなたが今あなたが住んでいる社会について問題があったらあなたはどうしますか」という設問があるんですね。いくつかの答えが用意されている。日本の子どもで一番多かった回答は、投票権一票行使する以外は、ちょっとこれ言い方が違いますが、選挙の時に一票を投じる以外に、一切関わらない。あるいは関わりたくないとか、そういう子が一番多かった。その理由として一番多かったのは「個人の力では何ともならないんだ」という言葉が、日本の子どもにいちばん高いというものでした。これはですね、最初の設問に関する回答は、世界11カ国の子どもの回答の１位と比べるとかなり大きな落差があるんですね。そんな風に私は一票を投じる以外は一切社会の問題に関わらないんだ、という回答が１位に来てたのは確か日本だけだったような気がする。なぜか、それはどうしてですかってときに、個人の力が及ばないな、という回答もですね、際だって多かったような気がするわけです。私たちは、学校教育の中でその青年期の大きな教育の一つの課題として、そういう問題を煮詰めていくということは、とても大事なんではないだろうか。今回、総合人間科が、取り組んでこられた先生方に、子どもたちはそういった側面から目的意識を持って、自分の生き方

をとらえて、そして一所懸命希望を持ちながら将来へ歩いていく、巣立っていきたいという願いを込めていたから、当然といえば当然なんですが、しかし今、最初に申し上げた、これからの教育課程で、総合的な学習の時間が取り上げられたからやるというだけではなくて、本来この実践が、名大附属の先生方がなぜこういう実践に取りかかろうと思ったのか、そもそものねらい、こういうところに着目して、この青年教育としての意義というものをぜひ着目して、何とか総合人間科的な教科とか、来年から実施できなければですね、今の指導要領のホームルーム活動・学級活動でもこういうことをやるんだ、やることになっているんだとちょっと気づいていただいて取り組んでいただくとありがたいなと思います。それから、最後になりますが、指導方法の問題の中で、やはり地域の方、あるいは保護者の方、あるいは地域のグループ、など色々な言い方をしますが。私は実は進路指導の、中高の進路指導の担当なんですけども、今私ども進路指導のああいったところは、保護者とともに進める進路指導という、私が勝手に言ってるだけですけど、キャッチフレーズにしてるだけなんですけども、地域保護者ともに進める、これまではですね、連携だとかひどい場合には保護者の啓発だとかという言葉も使ってたんですけども、そういうようないっしょにやる、子どもたちの権利については一緒に責任持つような、という意味も込めて、一緒に。総合人間科の学習もそうでありましたし、これから、行われる総合的な学習の時間も、ああそういったことになるんだなということで。それから本当に最後です。ひとことだけ。この総合人間科の学習が、大学進学には役立たないという言葉がありましたけども、ある意味で言うと、そうだからこそ価値があるのかもしれない。本間君に申し上げたいと思いますけれども、だからこそ価値があるのかもしれない、ということで、ただですね、もう一つ付け足しますと、この学び方、こういった学習のあり方は、もし、本間君が大学に行ったときには、大学での学習勉強のあり方と、非常にうまくマッチするだろう。いわゆる受験の中の勉強をしてきた、それだけに集中してきた高校生たちが、大学に入ってとまどうようなとまどいは、本間君にはない、ということを最後に申し上げまして、私の方からの、大きく二つに分けましたけれども、言わさせていただきました。
（拍手）

槙本　ありがとうございました。では提案者の最後に、先ほど講演をいただきました、水越先生に、講演の時間が短かったようなので、よろしくお願いいたします。

水越　できるだけ短い時間でやらしていただきますが、私はですね、総合的学習ということを、自分自身も非常に大事だと思っていろんな学校と一緒にやってきたんですが、私はあのカリキュラムの点ではお隣に専門家がおられるのでですね、言う必要もないと思うんですが、この道はいつか来た道なんですね。決して今初めて始まったわけじゃない。戦後のコアカリキュラムの時はどうだったかと。あるいは昭和10年代の戦前戦中の段階で、総合の総という字がちょっと違いますけれども、宗っていう字を書いたりしますけれども、やったんではないかと。そうすると、２回３回とまわってきているのが、少なくとも戦後のコアカリキュラム。あるいは経験主義のレッテルを貼られて、学力低下を招いた、あの、総合学習コアカリキュラム総合活動と、今のものとはどう違うのか。そこをしっかりしないで、また、なんか文部省の中間まとめが来たからそれ行くかというのでは、あまりにも軽薄じゃないかと。これまあ安彦先生が言われることであって私が言う必要はないかもわかりませんが、私はそう思います。

今日私がＯＨＰでやらしてもらったり、本校の発表の中には、明らかに戦後のコアカリキュラムにはない、はっきりとした、環境にしろ、情報にしろ、国際にしろ、柱があると言うことは、これは一つの大きな、なんと言いますかね、同じように、上から見とると同じとこぐるぐる回るようですけども、横から見ると螺旋のねじが１回、２回分あがっているということを申し上げたいと思います。ただですね、それにも関わらず、私は、こういうことを考えるんですね。それは、総合的な学習をやるときには教科書もない。生徒たちが自分で一生懸命にさがしてやる。そうすると、果たしてそれで本当に必要なものに位置づくことができるだろうか。やっぱりですね、一度専門家が営々として築き上げてきたり、もう少し広い視野で全国的あるいは世界的なグローバルな視野で見るという視点が、今の小学生中学生高校生にないのは当然なんであって、いや教師にすらないのが当然であって、そうするとそういうように主要なるものは何か。それは私はですね、こないだ岡山の放送教育の専門プラザにも行ったんですが、それは、やっぱり一つは放送番組テレビであり、新聞である。こういうものがやはり非常に大事な現在おこりつつある問題、あるいは明日おこる問題についての、非常に詳しいデータを出すのである、ということが言えるわけですね。テレビとか新聞というのは、

いわば中央で、どっかで作って、だからＮＨＫの場合、渋谷で作って、あるいは、まあ、名古屋でも一部も作りましたけれども、そこの作ったものが、全国津々浦々に流れるわけです。たとえば私も関係しましたが、昭和50年から昭和60年まで、名古屋のＮＨＫでは「緑の地球」という番組を作りました。覚えておられる方もあるかもわかりません。あれはもう、非常にすばらしい環境番組なんです。ところが視聴率は、０.、あの、もう一つ０がつくくらい低い。惨めな状態を続けて、そして毎年、諮問会に行くと、このデータはなんですかと、いうふうに言われ続けて、あれだけの番組が、視聴率が最低記録を続けて、とうとう10年目で打ちきりになったんです。あれはもっと続けておったらな、と思うくらいすばらしい番組。理由は簡単なんです。当時、環境教育を受ける場がなかった。だから、自分の理科の授業を犠牲にして、社会科の授業を犠牲にし、英語の授業を犠牲にして、「緑の地球」を見てくれる中学校の先生はいなかった。小学校の先生はまあ何でも使えるとは言うもののやっぱり、環境というのはまだそのころ、リモートでしたからねえ。50年代というのは。したがって、受け皿がなかっただけであって、内容的には今のたった一つの地球と比べて、全然見劣りしない、立派な環境番組を作っておったんです。ああいうものはやっぱりこれからも必要だと思うんですね。つまり中央から作って、全国津々浦々へ流す。これはあのトップダウン形式であります。しかし、今の番組での取材では、もうトップダウンだけではやっていけません。まずここにおられるような学生諸君は、もうその上から、全国津々浦々同じものを流れるということに対して、本能的な反発力を持っております。ですから、もう一方のボトムアップというのがどうしても必要なんです。ボトムアップというのが。つまり、自分たちがはいずり回って経験して、下からどんどん送り出していく。そういうことが一方において必要である。ボトムアップをするメディアは何か、といったら、インターネットです。そうすれば、自分たちのたとえばこの名古屋大学の附属中高がホームページ立ち上げて、今やっておったことをどんどん打ち出してくれるならば、海外の日本人学校からでもアクセスできるんです。全世界に出せるんです。何も自分たちのクラスだけで、あれだけの立派な発表を終わらすことは何もないんです。私の研究室からでもアクセスできるはずなんです。そういうことを、まだ、ここはあまりやられていない。と思いますね。今日、コンピューター教室で見せてもらいましたけれども、あそこからは全然発信してない。ですから、そういう意味からすると、いわば、もう上に上がって行くだけの時間がありませんから書きませんけれども、三角形の逆三角形と普通の正三角形こう二つ重ねてみてください。逆三角形のやつは、トップダウンです。そのトップダウンが故に、テレビはあれだけの映像を見せながら、やがてテレビの消える日という本が、現に、ビルダーなんかが書いてでております。つまりトップダウンだけでは世の中そうできてない。しかし逆にボトムアップだけでは、自分たちの調べたことを発信することの喜びを感ずるだけでは、「インターネットは空っぽの洞窟」という本になってしまいます。つまり中身がない。やったことは楽しいだけであって、ちっともそれはいわば、本当の意味の筋の通ったものにはならない。そうするとその三角形を逆三角形のトップダウンと、いわゆる正三角形のボトムアップと、この二つを重ねて、相互に行き来させることによって、初めて私はですね、この種の教育を支えるだけのメディア環境ができるんだと思います。それがやれてないじゃないですか。それはやっぱりぼくは必要だと思うんですね。もっとどんどん、今日一部使っておられたんです。特に、いわゆる、体外受精なんかやっておられるクラスでは、英語使ってましたね。私はですね、そういう英語をね、単なるものをどんどん広げていく。新聞の切り抜きをやる。一方において自分たちの調べたものはどんどん発信し、サーチをかけていろんなところのものと交流する。こういうことが、私は、やっていただきたいな、というふうに思いました。こないだの日曜日、午後に、教育テレビで、岡山大会の模様を、１時間15分にわたって出したはずです。もういっぺん12月に出しますから見てください。相手は小学生ですけれども、なんと中学校の山口大学附属光中学のおろすみ湾の水の汚れと、それから、岡山の旭川が流れ込むところの児島湾の水の汚れと、中学生と小学生、山口の子どもと岡山の子どもが、インターネットを通じて、自分たちの調べた結果をテレビカメラで交流してるじゃないですか。だからそういうような形で、ボトムアップと、それから、トップダウンというのを組み合わしてやっていただきたい。そういうことが、また新しい刺激にもなってくる。

私は昨日、ＮＨＫを見まして、藍色というものが、なるほど、ほんとに日本の文化の原点か、ということを知ると同時に、私が若かりし頃に見た淡谷のり子っていうのは、そういうあれの持ち主だったのか、だから彼女は青を着るのか。今ではもう足も動かずに、ベットで寝たままの90歳ですけれども、かつてのあの華やかな淡谷のり子が、そういう色にこだわったんだということを、私初めて知りました。そし

て、私が徳島の友人とやった鮎の研究というものが、それとつながるんだ、ってことを夕べ、ちょっと興奮をしながら番組を見ました。やっぱりトップダウンはいいとこありますよ。しかしトップダウンだけではだめなんで、もう一つはボトムアップ。この両方をぜひとも、つなげてやっていただきたいと思います。最後にあの、彼のために申しますと、私の、今４回生の学生で、映画で卒論を書くっていう。ほかに何回説得しても彼は映画。しかも、映画でも小津安二郎しかやらないって言うんで、これは困っちゃってですね、もう小津安二郎ったらとっくに死んでるしなあ、「東京物語」ってのはぼくの青春の頃のやつだと言っても、関係ない。彼はずーっと駆け出し時代の小津安二郎から、ずーっと最後までやって、「東京物語」だけではなくって、彼が、いわば、泊まり込んで、書いたシナリオを書いたところのおばさんまでインタビューしてますし、あの、小津安二郎が65センチのローアングルで女性を撮ったというその、カメラマンの実験を持ってますし、常に彼は、シナリオの横に、ここは杉村和夫、ここは、あの、スケッチを描いて、この角度からとれると、いう非常にスローテンポで動くような、独特の主張のカメラマンがやったってことを、彼は全部それをコピーして持ってきてます。これで、私も、行けるだけの旅費は少しずつ彼に恵んであるんですけど、川田へ行く東京へ行く。まあしかし大変ですな。この子一人のために私は10人分の卒論の指導と対等ぐらいありますが、それくらい彼はこだわりを持ってます。だから映画にこだわりを持つっていうのは、何らおかしいことではない。先生がおっしゃったように、大学へ入ったらそういうことを追求するような学生に必ずなれると思います。入学の時にはとんでもない大学でない限りは、なかなか今の受験体制は崩れないかもわかりませんが、私は、しかし、来ていただくならば、喜んで、もういっぺん、卒論に、映画を書いてもらっても結構でございます。
(拍手)

槙本　ありがとうございました。これで提案者からの提案が終わりましたので、10分ほど休憩をとりまして、そのあと指定討論者の方に入っていただきたいと思います。最初入り口のところで質問票をお渡ししてあると思いますので、すべて答えられないと思いますけれども、もし質問がありましたら、司会席の方まで質問票をお寄せください。よろしくお願いします。

安彦　お二人の先生から是非御意見を伺いたいと思いますので、一応、10分をめどにおひとりずつお願いをしたいと思います。四方先生からまず御意見をいただきたいと思います。どうぞよろしく。

四方　只今御紹介に与りました、四方でございます。四方と申しましても、たぶんご存じないと思いますので、少し自己紹介をさせていただきます。先程から、受験の発言がありまして、受験の悪口がかなり叫ばれていますが、私は数学が専攻でございます。ですから、少し先生方の切り口と私の切り口が違っていることをお許し頂きたいのですが、また、先程水越先生がおっしゃいましたが、コアカリキュラムの時代、昭和20年代、学力低下を招いた、そのころの、私は学生でございます。現在は、60歳でございます。私の立場を申し上げさせていただきます。私は数学を専門にしております。ですから受験戦争からいえば最大の悪人でございます。それでありますにも関わらず、といいますか、私の経歴がコアカリキュラムで育った時代でございまして、学力はそんなにございません。ですけれど、コアカリキュラムのファンでございます。というより、コアカリキュラムを教えていただいた先生のファンでございます。それから、名古屋大学で何度か総合人間学科を拝見させていただきましたが、それについてもファンになりました。これこそ、教育であろうと思っております。ただし、そのときにやっぱり、今教えておりますものですから、怖いことがいっぱいある。と申しますのは、先程、ディベートの話が出て参りましたが、一種のディベートをするとき、教師は試合をさせるわけですが、そのときに教師は裸にされるのだと思います。裸にされたときに、裸になっても、先程服を脱ぎましたが、服を脱いでもまだ見られる人間であるかと。これを聞かれるときに、非常に辛い想いをするだろうと思います。大学でも時々そういうことが起こるんです。なぜそういうことが起こっちゃうかといいますと、たぶん２つ、原因を考えていた。これは先生方にちょっとご批判いただきたいと思うんですが、現在、技術とか科学、それから社会自身も非常に複雑化して参りました。先程、こちらに燃えておりますガスストーブ、石油ストーブが少し炎があがりすぎて先生方が少し手配なさってたのをお気づきだったかどうか知りませんが、昔の石油ストーブですと、単純に石油があって、単純に、なんでしたっけ、芯がございまして燃えるだけでよかったんです。空気の量を調節するだけの仕事でよかったんです。ところが今の石油ストーブ、御覧になっていただければすぐ、たいてい電源コードがついておりまして、コンピューターです。壊れちゃっ

たらもうどうしようもない。ですから、昔学校で教わりました技術で昔の石油ストーブは十分であったところが、現在の石油ストーブですとコンピューターまで習ってなきゃとうてい追いつかない。てんてこ舞いしちゃう、そういうふうなとんでもない状況が起こっております。石油ストーブばかりじゃなしに、その辺にビデオがありますし、このマイク自身もそうでございましょう。その技術を知らないとどうしようもなくなっちゃう。すなわち、ある意味で、この技術とか科学とか社会自身の複雑化が学校教育を追い抜いたんじゃないかという危惧を私自身持つんです。どっかで先程憲法９条の話が出ましたけれど、憲法９条の構造が、例えばもっと簡単な聖徳太子の十七条憲法とか、それとかワイマール憲法に比べてどんだけ複雑になっておるか、たぶんお気づきになった方多いと思います。それを追っかけるのが本来学校であって、それにオーバーライドできる人間を作るのが学校の役目であったんでしょうが、どうもこう、我々それをできなくなっちゃって、あえて心配を申し上げますと、総合人間学科っていうのは、ひょっとして、「それが学校で対処しきれなくなっちゃったから、おまえたち勝手にやれ」と、そういうようなものではないだろうと思うんです。絶対ないと保証していただきたいです。これは的場先生にお伺いするか、安彦先生が半分ファンであるし、身構えているようなことをおっしゃってましたけども、ひょっとしてそれかなと思っておりますので、是非、そんなことは絶対ないとお答えいただきたいんです。それからもう一つ、この総合人間科のメリットとして、友人ができた、それから人間とのつき合い方が非常にうまくいくようになったというお言葉がいくつかございました。これ確かに認めます。本当にそうです。ただしかしながら、私どもの学生時代、学力低下したコアカリキュラムの時代の子どもにとっては、例えばこういうことは駄菓子屋で教わったんではなかったか、それから大学へ入りますと、コンパやパーティーで友達と飲んだくれてやったんじゃなかったか、高校時代も、まあ言っちゃあいけませんけども、少しはやったです。そういう風な社会とか家庭なんかが教育力というのを多少減退させておるという傾向がないのか。一方、パーティーとか駄菓子屋というのは、我々の教育の場であったわけであります。それに向かってもう一度、それこそこう、歴史の字を逆に書こうとしておる、まさかそんなことはないとおっしゃっていただきたいです。それから外国の例が水越先生から出ましたけども、外国でのディベートの技術というのは本当に恐ろしいもので、本当に裸にしちゃうんです。そのディベートの技術がどこで磨かれるのかと申しますと、先程のパーティーがありますし、それからヨーロッパでの水越先生の例はイギリスだったと思うんですが、まだ貴族が出てきておりましたので、サロンがあります。そこのサロンで本当に裸にされちゃうという経験が何度かあるわけです。あるいは大学受験より厳しい。そのサロンで何を聞かれたのか。ディベートの中でもそうでしょうが、それに答えられないと、その次から呼んでくれない。どのサロンに属しているかで、その人の実力が決められてしまう。今さっきから大学受験を悪者になさっておりますが、大学受験以上に厳しい社会もございます。本当はそこに突っ込んでいって、そこを乗り切っていくのが総合人間科の一つのあれではなかったかと思うんです。実は大学受験が私らの学力低下を招いたものですから、本気になって大学受験ってのはたった一枚のペーパーです。だから、これは一つの成人になるための通過儀礼ぐらいに思っておけばええわけです。やっぱりそれくらいのつもりでですね、大学受験ってのは乗り越えてってほしいんです。ある意味でマスコミってのは騒ぎすぎだと。

ここで私が期待しております反論は、私があえてつけました、「あえてつけました」という言葉をあえてつけさせていただきます。我々甘ったれてるんじゃねえ、総合人間科で形成する人と人との関わりというのは駄菓子屋で我々が作ったものより一つ上なんだと。何を教えるかと、なぜそれを教えるか、そしてそれをどうやって教えるかという学校の持つべき義務を放棄したわけでは決してないと是非断言していただきたいと思うんであります。どうもすいません。ちょっととんちんかんな質問になったかもしれませんが、とにかく私もういっぺん繰り返します。名古屋大学における総合人間科のファンであります。これがますます将来に向かって伸びていってくれることを心から祈っております。どうもありがとうございました。

安彦　ありがとうございました。どうも、賛成者がいたんでは指定討論者の側から賛成されていたんでは、ちょっと人選を誤ったかと思います。恐縮でございました。続いて山田先生にお願いいたします。

山田　山田でございます。本当にこんなに長時間、私は人の話に聞き入ったという経験は、年齢66ぐらいになりますけども、そんなにないことでございます。とても快い疲れと申しましょうか、そういうものを感じて今この席に立っております。私は教育学が専攻でございまして、この３月まで大学生を40年

近く見てまいりましたけれども、本当にこの大学生の変わり様もさることながら、本当に我々自身の生活そのものがずいぶんやっぱりこの3,40年で変質してまいりまして、その中で、やる気、意欲ですね、それからコミュニケーション能力が異常に低下してきていることが私もよく調査に加わりますし、学生を見ながら、学生自身の責任ではございませんけれども、強く感じてきたわけです。今日午前中、私は中学校１年生の、これは「人の出会い」でしたね、その授業と３年生の「生きがい」ですね、その授業を見せていただきまして、本当に、本音で自分の意見や考えを中学１年生は中学１年生なりにかわいらしくやや気どってですね、やはりコミック風に表現するというような討論をしておりました。そして３年生になりますと、本当にじっくり落ち着いて、そう言ってはなんですけども、頼りがいのある青年に育ったという姿を垣間見させていただいて、感動しておるわけでございます。

私は、意見というよりも、お教え願いたいということと一緒に考えたいことを２点申し上げまして指定討論者の役割を果たしたいと思いますが、まず第一点はですね、この総合的学習、総合学習のテーマをどのように決めておられるかですね。授業を見ておりますと、それなりに生徒諸君は自分で関心を持ったりやる気を持ったりして表現しておることを感じますけれども、このテーマをどういう風に設定されておるのか。大きな枠組みは聞きますけれども、この資料に書いてございますけれども、子ども、生徒自身が本当にこういうことに興味関心を持っている、いろんな領域で、いろんなレベルで生徒諸君の興味関心はあろうことかと思いますけども、それをどういう風にコミュニケートしながら、深めながらテーマを作っていくか、このこと自体も総合学習として非常に重要な教育機能のある場面ではないかと思うんですけども、そういうテーマ設定をどのように設定しておられるのか、私は、教師が決めることはよくない、そんな言葉を言おうと思ってきたわけではございませんけども、どういう風に作り上げておられるのか。私が一番今懸念しているのは、受験のことについてもそうなんですけども、受験勉強や受験教育そのものが悪いんじゃなくて、詰め込み教育と暗記学習というのは人間を育てるための教育ではないし、人間の学び方ではないわけであって、この総合学習のテーマが、ある意味、教師の、生徒への詰め込みになってないだろうか、生徒諸君がそうではないですよと言ったそうですけども、迎合的に興味関心を示しながら総合学習のテーマを設定されているのかどうか、その点を一つはっきりさせていただきたいと。これでおわかりいただけたでしょうか。いわゆる総合学習のテーマが、子どもたちの興味関心とその興味関心の中身の価値というものを、どういう風に吟味しながら、生徒と教師が総合学習を作り上げていくのか。このあたりを一つお教えいただきたいと思います。

それから第二点目はやや視点が違いますけれども、総合学習の資料や研究室をたくさん送っていただきまして、それなりに勉強させていただきました。そして今日、実際そういう場面に直接対峙いたしまして、総合学習そのものの価値、それを私は非常に高く評価いたしますけども、それと同時に、今度の改訂の中で総合学習と共に基礎・基本の重視ということが言われておりまして、カリキュラムですね、基礎・基本てのは非常に中身がはっきりしません。このことをお互いに確認しあいたいと思うんですけども、基礎・基本というものを否定する人はないと思うんですけども、こういう状況の中のカリキュラムの中の基礎・基本というもの、これは中学校なら中学校なりに、小学校なら小学校なりに、また各学年なりに基礎・基本もあろうかと思います。そういう点から言って、総合学習をずっとおやりになってこられる中でですね、総合学習を展開してこられる中で、この総合学習のためにはこういうことが基礎・基本としてきちっとマスターされておくことが必要であるか、同時にその基礎・基本を総合学習を行われるときに、基礎・基本を同時にお互いに学びあわなきゃならないという風に考えたときに、総合学習を展開する中で、基礎・基本学習の内容というものが同時に整理されていくと申しましょうか、抽出されていくと申しましょうか、整備されていくと申しましょうか、そういうことが行われるべきであって、総合学習は総合学習で進み、既成学科は既成学科として放置されるということはないだろうと思いますし、この学校の研究発表を見ておりましても、到達度は高いだろうと書いてございます。ですから課題として指摘してほしいと思うんですが、そしてさらに３年間の取り組みの中から総合学習を展開するにあたって基礎・基本ということは、このあたりのところは、十分整理されているかどうかは別にしてみて、これから整理されていくに際しても、何かおわかりの点がございましたらお教えいただきたい。この２点を今日はお願いいたします。どうもありがとうございました。

安彦　どうもありがとうございました。それではちょうど後10分になりました。なかなか皆様からご質問をたくさん頂きましてありがとうございました。

しかし10分では到底全てに答えることができません。本、その他中身で、一旦読んでいただいて、それを見てくださった上でまたご質問があれば、特にコンピューター、パソコン、あるいはインターネットとの関係では、書物の方の71ページから72ページの所に昨年度の実践がありまして、世界30校の学校との交流が入っております。まあ、その他、その点については本の方で見ていただくことにしまして、あと、それぞれ３人の先生を中心に、今の山田先生のご質問等も丸山先生などからまた頂くということで、全てには答えられませんが、一言ずつ、そのご質問に関わることを水越先生から順にお話ください。

水越　はい。最後に回ってくると思っておりましたので、今日はいつも安彦先生に裏をかかれて申し訳ありません。ごく限られた時間がございますので一つ二つしか申しませんが、１つはですね、こういう総合的な学習というのは全ての学校、あるいは大多数の学校でやらなきゃいけないことか、旧制高校のような学校もあっていいんではないかというご指摘がございましたが、私は、先程山田先生が言われたこととも関係がございますが、やる、やらないというよりも教科で、それぞれの教科で真学問が後ろにあって、それを背景にしてきちんと整理した知識を教えていくというやり方と、総合的な学習てのはむしろ自分で求めてやると同時に横へ繋いでいく学習だと思うんですね。総合的学習やって、また教科の内容に戻って勉強して、もういっぺんそれを横に繋ぐという、こういう今までのずっと縦に整然と並んでいたやつが、横にもつながり縦にもつながり斜めにも、という形で自分の内容の中に、自分の隙間の中に取り込んでいくということが必要なんで、そのためには、私は、総合的学習のやり方ってのはまだいろいろあると思うんです。これからいろんな形のものが、高校と中学ではまた違うでしょうし、大規模校と小規模校でまた違うでしょうし、いずれにしても、きちんとした、整理されたものを学習するものと、それからむしろ自分でいろいろなものの経験なり、積みながらそれを繋げていくものと、この２つのものが別々ではなくてむしろそれがどういうような形で生徒の中に統合されていくかということを中心にしなきゃいけないと思います。ですから、総合的学習よりもうんと総合活動的なものに近いものが、あるいはクロスカリキュラムに近いものから、あるいは相関的なものから、いろいろなレベルのものがあってもいいし、合科的選択と私が言ったのもそのことなんで、そういうような横に繋ぐ面と縦にきちんと整理するものと生徒が往復しながら自分のシェアを作るというような形になればいい。だから総合的学習を、ふたを開けてみると学校によって非常に中心のテーマが違ったものになっても、学習形態が変わったものになってもそれはかまわないというふうに私は思います。

それからもう一つだけ申しますと、インターネットのことを私は言いましたが、その予算とか、更新、新しく換えていったりレンタルでもするとかですね、あるいは通信コスト、誰が出すのかということですが、私はお金はですね、情報をとるには絶対に金はかかるということです。今、中学校で一人に一台、小学校では二人で一台という方向を目指すと文部省は言っておられます。あるいは一般の教育委員会が言っておられますが、これは真っ赤な嘘でありまして、それは間違いです。どうして二人に一台になったか私は知りませんが、小学校600人の所に二人に一台やろうと思ったら300台のパソコンが要るわけです。そうじゃないですか。どうしてコンピューター一台について何人の生徒が使えるかという計算をしないとだめです。日本はだいたい一台について35人ぐらいです。アメリカは７.何人かです。一台について７.何人と一台について35人、この差が日米間にあるということをはっきり自覚しないと、市会議員さんの答弁にはいいかもしれない。二人に一台、一人に一台、でもそれは違います。これが一つ。それから、我々が自由にそういうものをやりとりして情報をとる、通信コストが確かにかかります。しかし、お考えになってるほど実はインターネットのお金はかかりません。自分の所から最短距離の局までの間の料金は払いますけども、後は私ども全部の通話料を払ってるわけではありません。しかし、金はかかります。金はかかるけども、一定の予算のうち何に重点して買い物するか、名古屋市全部を同じコンピューターの機種をそろえて、同じ時期に同じ台数を入れるというようには私は思いません。現に京都市では７台入れるところと二十何台入れる所と差をつけておりますし、インターネットに繋いでいる所と繋いでいない所と差をつけております。それは、私はやれるところから、そういう意欲を持って実践をしめすところからつけていくべきだという風に思います。金はかかります。しかし、何に金をかけるかということの優先順位をやっぱり考えていくべき時ではないでしょうか。私はそんなふうに考えております。一つの所にコンピューターを全部入れて、そして鍵をかけてという発想だけでは、これからインターネットを繋いでもっとうまくするような方法にはいかない。

安彦　ありがとうございました。鹿嶋先生、全部じゃなくて。

鹿嶋　はい。たくさん頂きましたが、可能な限りお答えしますが、それぞれ短くお答えします。誤解を生むかもしれませんが、もし何か聞きたいことがあれば終わりましたら後でお願いいたします。ご質問がございましたが、教員免許証との関係ですが、文部省の中間まとめでは全教員が一致して協力して行う、こういうことであります。この点については、私どもは総合学学科についても教科の枠を越えて教えていただきますけども、私どもは、先生方はできるという信頼を申し上げております。それから今出ました総合人間学科と課題研究はどう違うのかというご質問もありましたが、総合人間科はある程度について教科横断的な串刺し的な、それに対して課題研究はむしろ専門の深化、自分が勉強してきた学科とか学習系列の専門に基づく課題設定ということでありますので、必ずしも非常に幅広い教科横断的な課題設定の仕方はしないというのが大きな違いだと、このように思っております。で、産業社会と人間はどう違うか。産業社会と人間は自分の課題設定とは関係ありません。むしろこれは第１学年時におけるガイダンス的な科目だと、選択と適応に関わるガイダンス的な科目だと、こういうことで全く違っております。それから総合化の評定はどうするのかということでありますが、今回の小、中については、学習指導要領上の位置づけは、教科以外の教育活動という位置づけです。従って数値的な評価を行わないというのが中間まとめで述べられている評価のあり方だと。高校については未定であります。どういう位置づけするのか未定であります。それから、生徒を外出させる場合の時間ですが、教育活動委員会の中間まとめは、週２単位時間が、年間70時間という言い方をしております。つまり必ず週１時間とか２時間とか位置づける指導の、時間の設定の仕方ではないというふうに言っております。私もその方がいいと思っております。必ず週１時間とか２時間とかやる時間じゃなくて、年間の中で何十時間、70時間以上、そういう指導計画の立て方がいいんだというように思います。それから総合人間科の理念の背景でありますが、今水越先生からお話頂きましたが、今まで小から高まで、考えてみると、学問体系に従って縦の串刺しでは絶対ありません。数学は算数、理科も小学校から。しかしそういう中で教科にまたがるような広い視野で物事を見ていくようなことが今求められているのに、それが今学校教育の中でどれだけできているんだろうかっていう、そもそも根本的な問題の中から総合的な学習の時間の考え方が出てきたと思っていますので、ご質問にあるように、今日本の産業界がアイデアマンを求めているから総合人間科が出てくるのかと、そういうことでは、そもそも教育の問題としてそういう課題意識があって出てきたものであると思いますので、産業界もそうかもしれませんけども、教育の世界でも学問の世界でも求められているのではないかということであります。早口ではありましたがだいたいお答えしたかと思います。

安彦　ありがとうございました。ちょっと振りまして、二人の生徒に今の評定のことを質問してきてる先生がおられます。「数値化された評価を求めますか、評定を求めますか、どういう評価をしてほしいですか、どういう形態のものを望みますか」ということですが、数値的な５，４，３，２，１とかそういうのがほしいか、それとも別の評価の仕方をして考えてほしいと、どうですか。

本間　数字的な評価っていうものはですね、やはり生徒の立場としては欲しいことは欲しいです。でもその評価の基準がないからすごく先生たちは困るんじゃないかなと思うし、逆に生徒が、例えば通知表見せ合いっこした時に「なんでお前が３で俺が５なんだ」ていう話を、なった時にどうしてかなっていうことになっちゃうと思うんで、やっぱりそれは評価というより、例えば僕みたいにしゃべるのは得意だけどもっていう人だったらそういうしゃべる場を与えるとか、しゃべるのは苦手だけどまとめたりちゃんと研究はしているよって人だったら研究論文という形のものをしっかりした形でまとめるとか、そういうやり方がいいんじゃないですかね。

安彦　渡辺君どうですか。

渡辺　僕は総合人間科を数字で評価してほしくないと思います。ただ、さっきここでしゃべった本間君は非常にうまくしゃべったのに、僕はあがってしまってうまくしゃべれなかったんで、しゃべれるとか、うまくしゃべれるとか、そういう表現できるというのは数字に表せると思うんですが、どう考えてるのか、何を考えてるのかってのは数字で表せないことだと思います。だから総合人間科を数字では表せない科目だと思います。

安彦　はい、ありがとう。ということ、意味深長なこともありますが、ご理解、ご検討ください。それ

では、もう時間も過ぎております。最後に、丸山先生実は本当はお願いしたかったんですが、時間切れております。飛ばします。的場先生に、先程四方先生から言われた点もありますね、それから総合人間科の良さと、きっぱりとどう考えるかということ。それから山田先生からのご質問がありました。基礎・基本、特に強制的なところがないかと、ちょっとそこ裏表なんですけども、その点も含めて一言お願いします。

的場　あの出てきてる質問もですね、教師の質とかやる気のない先生ということもでてきますが、この総合人間科ができるときの、どうしてできたかをお答えしたいと思います。ちょっと飛びますけども、こういう研究会がありますと、特に有名な高校からたくさんいらっしゃいます。そして帰り際にですね、先生たち名大は変わらないでくださいよって言われます。自分の所だけ変えて受験をやったというような教育をやられるんだなと、何となくむなしくなるわけです。例えばですね、ドイツに私が行ったときには、ドイツの子どもたちは学力低下している。特にあのハウプトシューレで学力が低下し授業が成り立たない。そういう所で、具体的には自分たちの教室を探していく、とか自分たちの居場所はどういうとこなんだかというような小学校でやるようなことを中学校でやってるわけですね。で、名古屋大学のこの総合人間科が生まれる時の基盤というのはですね、先程一番最初に安彦先生の方からありましたけども、確かに、名大の附属がひょっとしたら消えるかもしれないという危機感があったと思います。しかしもう一つ、これを作り出した動機というか、ものはですね、一番最初は、附属と大学とが合意を交わした、どういう子どもたちを育てていくか。ここに書いてありますが63年のところでは、受験という動機づけではなくて本来の学習とは何か、で、基礎学力をつけさせ、そして且つそれぞれの生き方をつかませようという、一応合意を見たわけです。しかしもう一つ大事なことは、では個性とは何か、これが３年くらい前からですね、一生懸命各先生方と、附属と大学側とで個性とはもう少し突き詰めて、本当に自信を持って自分たちがこういう子を採りたいという子どもを創るためには個性とは何かということを突き詰めていこうと、そういうものがあったわけですね。ですから私は、そういうものがあってですね、レジメに書いてますけども、先生同士が、四方先生が言われましたけれども、学級団を組んでいきますとディベートだけじゃなくて、お互いに裸にならなければいけない。で、この中で、自分たちの学力保証はどうするんだ、受験勉強はどうするんだってことを一生懸命話されたと思うんです。そういう中でもう少しお互い裸になって、私はこれを内の方へ開かれたというふうに思います。そしてもう一つはですね、ここの本にありますけども、牛乳のことならまかせてよという先生がいるわけですね。どういうことかと申しますと、先生が困るわけです。そして実際に飛んでいくわけですね、一緒に行くわけです。その中で先生も動き出すわけですね。そういう過程の中で変わっていく可能性というものがいくつかあるわけですね。そして実際、生徒と同様に喜んで、牛乳のことはよくわかる、低温殺菌と高温殺菌とどこが違うか先生分かるという形に聞かれてもですね、こういう具合にして変わっていくんじゃなかろうかと。大事なのはどうして総合人間科を始めたか。その背景は、個性とは何かということをこの大学と附属の先生方が一生懸命進めた、それが大事なことじゃなかろうかと思っております。

安彦　どうもありがとうございました。時間が本当に過ぎております。大変恐縮ですけども、むしろ時間の方で切らせていただくという初めからの約束ですので、これで切らせていただきます。一部の先生方から、あるいは子どもたちから出た学力保証の問題というのは非常に大きな問題です。私どもも悩んでいます。しかしこれはこの場で議論してもたぶん一日中やっても間に合わない内容のものでしょう。また同時に、私ども、学力保証は単に高校の方の側からだけのアプローチだけではすまない、必ずしも大学入試に受かることが学力保証ではない。従って私たちがこの青年期の子どもたち、本校のようにいろんな分野に出ていく子どもたちにそれなりの学力をどう保証するかということは、総合人間科を含めて、本当に教科を改めて、全体の構造を、６年間の構造をカリキュラム全体の構造を考えなければならないと思っております。総合人間科を導入することは、当然先生方ご指摘の通りで、各教科がどれほど質的に変わるのかということと不可分なんですが、現状では本校はまだまだその点の準備が不足しております。やはり研究開発やりますと、どうしてもそちらの方に開発の対象の方にいくものですから、残された各教科の中身については手を入れられなかったというのが実状です。で、私は私なりに、やはり総合的学習が中身によっては是非必要で、必修でなければならないというぐらいに思っているところがあるのですけども、問題は、ですから中身をどう決めるかということが今後各学校に任されますので、まさにそこのところで先生方がどういう教育観、あ

るいは人間観、理想を追求されるのか、それが試されることになると思います。で、改めてそういう意味で、教育研究者、あるいは附属学校としては身の引き締まる思いがいたします。四方先生、山田先生から突きつけられた問題も正面から受け止めて、またそれを深めていかなければいけないと思っております。しかし今日は子どもたちに一番いいところをさらわれたと思っております。どうもありがとうございました。